

がん化学療法看護認定看護師と訪問看護ステーションとの連携を強化する取り組みに関する研究～「化学療法室と訪問看護ステーションをつなぐ情報共有シート（連携シート）」を活用して～

研究代表者 堤 育子（訪問看護ステーションぱりおん）

共同研究者 前村香織（都城病院）村上純子（宮崎東病院）三輪真砂子（田野病院）新坂ともみ 荒川環（宮崎大学附属病院） 仲田恵美 津曲竜一（県立宮崎病院）仲村典子（県立延岡病院）徳田美喜（県立日南病院）高橋尚子（潤和会記念病院）高畑清美（三州病院）長谷川珠代（宮崎大学医学部看護学科）長内さゆり（訪問看護ステーションぱりおん）

研究要旨

がん化学療法は、支持療法など医学の進歩や分子標的治療薬など新薬の開発により、入院から外来で積極的に行われるようになった。患者の社会環境や意識の変化から、がんの治療目的は治癒、症状緩和、延命と多様化している。近年外来でのがん化学療法を受ける患者は増えており、個々の社会背景は独居、老人世帯、施設入所などと様々である。患者の身体状況や認知機能によっては要介護状態となり訪問看護を受けているケースが増えている。

今回、研究者が訪問看護師やがん化学療法看護認定看護師へのヒアリングを行った結果、訪問看護を受けている多くの化学療法患者は薬剤名、副作用、治療内容や計画を正確に把握できておらず、また病院側は在宅療養の状況が見えないという問題があることがわかった。病院と在宅の情報を双方向性に共有することで、シームレスに安全な医療や看護の提供ができるのではないかと考え、共通の情報共有シートを作成（以下連携シート）し、その効果を検討した。

結果、1）連携シートは、訪問看護ステーションと化学療法室看護師との情報交換に有効である。2）連携シートは化学療法認定看護師の記載に負担がある為、利便性を高め、通信方法を検討する必要がある。3）連携シートの使用マニュアルを整備し訪問看護師、化学療法室看護師、患者が不安なく記載し通信する手段を確立する必要がある。4）施設を超えて情報を共有するために、連携シートだけでなくカンファレンス、インフォームドコンセントの場面に立ち会うことも情報共有の手段となることを見いだされた。

キーワード：外来がん化学療法 連携シート 訪問看護ステーション

化学療法の曝露対策

訪問看護ステーションを主体とした日中一時支援事業（医療ケアの必要な子ども達）の宿泊を伴う日中一時預かりの在り方に関する研究

研究代表者 原田 純子 ((株) マザー湘南 日中一時支援にじ 看護師)
共同研究者 中山 直子 ((株) マザー湘南 日中一時支援にじ 看護師)
塚田 桂子 ((株) マザー湘南 訪問看護そよかぜ 看護師)
水野 美奈子 ((株) マザー湘南 日中一時支援にじ 看護師)
平山 智恵子 ((株) マザー湘南 日中一時支援にじ 介護福祉士)
星 且二 (首都大学東京 教授)

研究要旨

本研究では、訪問看護ステーションが主体となった日中一時支援事業所が、地域で暮らす医療ケアの必要な重症心身障害児（以下、重心児）の保護者ニーズの一つでもある「宿泊」に焦点をあて、訪問看護と日中一時支援事業を併用している利用者の幼児3名、中学生1名とその保護者の協力を得て、宿泊モデル事業を実施した。

その結果、訪問看護ステーションを主体とした日中一時支援事業の宿泊は意義あるものだと認識できた。しかしながら、今後、地域で事業を形としていくためには、スタッフの確保、人件費、協力医療機関の必要性の有無、などの検討課題が分かり、更に模索検討していく必要性が解った。

Key Words : 訪問看護ステーション、日中一時支援事業、医療ケアの必要な子ども、宿泊

在宅で活用できる「新たんの吸引法」に伴う気道ケアに関する援助方法の開発 －内部吸引チューブの閉塞を改善するための1事例への看護実践－

研究代表者 本庄 幸代(かほく中央訪問看護ステーション 看護師)
共同研究者 塚崎 恵子(金沢大学医薬保健研究域保健学系 教授)
内瀬あゆみ(かほく中央訪問看護ステーション 看護師)
遠藤実千代(かほく中央訪問看護ステーション 看護師)
大平 美樹(かほく中央訪問看護ステーション 看護師)
平谷 敦子(かほく中央訪問看護ステーション 看護師)
別宗 稔美(かほく中央訪問看護ステーション 看護師)
宮野 明子(かほく中央訪問看護ステーション 看護師)

研究要旨

本研究は、在宅において「新たんの吸引法」に伴う気道ケアに関わる効果的な援助方法を訪問看護を利用している1事例への看護実践を通して明らかにすることを目的とした。

対象は、A訪問看護ステーションを利用している療養者B氏で、20代男性、脳炎後遺症後の重症心身障害者である。B氏は、1年前に気管切開して「新たんの吸引法」を開始、日中は人工鼻を装着して自発呼吸、夜間は人工呼吸器を装着している。「新たんの吸引法」を開始してから専用の気管カニューレ内部吸引チューブの閉塞が頻回に見られた。今回、内部吸引チューブの閉塞を防ぐために、室内環境、カニューレ内の加湿状態、気道ケア状況および閉塞時の環境を4か月間毎日モニタリングし、さらに、B氏に関わる訪問看護、訪問介護、訪問入浴、訪問リハビリの多職種間で事例検討会と勉強会を開催した。

その結果、内部吸引チューブは自発呼吸下で人工鼻装着時に閉塞する割合が多かった。B氏の場合は、室内の湿度65%以上・室温20℃以上・カニューレ温度30℃以上・体温36.0℃以上で管理し、それらを達成するための事例検討会と勉強会を実施したことで、多職種のスキルアップと連携に効果があったと考える。

Key Words : 新たんの吸引法、カニューレ内部吸引チューブ閉塞、訪問看護、人工鼻、気道ケア

※新たんの吸引法とは：

2010年に神経難病療養者のために開発された。薬事承認を取得し、マニュアルや手引書等があり、安全に痰を吸引できる方法として少しずつ普及してきている。「新たんの吸引法」は自動的に痰を低定量持続吸引して気道ケアに有効であると言われており、在宅においても活用され始めている。

多職種スタッフで提供する精神科訪問看護実践をめざして

研究代表者 吉野 賀寿美 (医療法人社団 五稜会病院 看護部長)
共同研究者 鈴木 由美子 (医療法人社団 五稜会病院 副院長)
八木 こずえ (北海道医療大学看護福祉学部看護学科 准教授)

研究要旨

本研究の目的は、単一職種および多職種両チームでの訪問看護の活動内容と連携方法を比較検討し、多職種連携の視点からその現状を考察することで、看護師単一職種で構成された訪問看護チームを多職種チームにスムーズに移行するための方法を見出すことである。質的記述的研究デザインを用い、病院訪問看護師4名、ACTチーム4名の計8名に対し、半構成的面接を実施し、支援内容や思いを語ってもらい、内容分析を行った。

結果を考察すると、多職種チーム内における専門職の役割とは、1)専門領域以外でもサービス利用者の生活を支援するためにできることを行うこと、2)自らの専門分野で気付けること、3)気づきをメンバーに発信し、チーム内でシェアして更なる支援につなげることの3つが考察され、多職種連携に必要な要素とは、1)リカバリーの概念を共通理念として掲げること、2)チームカンファレンスの実践の2つが示唆された。

Key Words : 精神科訪問看護, 多職種協働, チーム医療